

「第18回日本臨床環境医学会学術集会シンポジウム」

(臨床環境18:75, 2009)

座長からのひとこと
—シンポジウムを終えて—

坂 部 貢

東海大学医学部基礎医学系生体構造機能学領域
北里大学北里研究所病院臨床環境医学センター

第18回日本環境医学会学術集会は、第54回日本産業衛生学会・アレルギー免疫毒性研究会との合同開催として、川崎医科大学衛生学教授・大槻剛己先生を大会長として岡山市で開催された。笑顔満開の子ども達が、将来にわたってその笑顔を絶やすことの無い様にとの大槻会長の熱い祈りと願いが込められ、総会全体のテーマは「創造一笑顔の未来へー」となった。

本シンポジウムでは、「ストレス科学」を取り上げ、3名のシンポジストの先生方にそれぞれのお立場から研究成果や最近の研究動向についてご講演いただいた。

最初に、川崎医科大学・解剖学の樋田一徳先生から、「環境センサーとしての嗅覚」に関する最新の研究成果が報告された。感覚機能のうち嗅覚は個体の環境に存在する化学物質を感受する器官で、ヒトの場合は大気中に含まれる物質の情報を得る化学感覚器官として機能している。そこで樋田先生からは、解剖学者としてのお立場から嗅覚系の微細構造について主として電子顕微鏡を用いた研究成果が提示され、さらに嗅覚に関する精巧な分子メカニズムについて多くの興味ある報告がなされた。

続いて、国立精神・神経センター精神保健研究所心身医学研究部の安藤哲也先生には、「女性の食行動の異常、摂食障害と環境・遺伝要因」と題

して、最近増加傾向にある摂食障害について心身医学的なお立場からお話いただいた。若年女性の体型や食行動異常を決定する要因を心身相関の観点および遺伝・環境の相互作用の観点から明らかにし、若年女性の栄養状態の改善や摂食障害の発症の予防策開発のための基盤的知見が提示された。

最後は、徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部ストレス制御医学分野の六反一仁先生から「ここを映し出す DNA チップを用いたストレスゲノミクス研究」について報告していただいた。ストレス反応は、新しい環境に適応して生き抜くための基本的かつ重要な環境適応反応であるが、それを客観的に評価することが重要である。そこで演者らは、DNA チップを用いてストレス関連遺伝子の発現を網羅的に解析しパターン化することが有力な方法であると考え、末梢白血球遺伝子のプロファイリングを行い、ストレスを客観的に評価する方法を開発した。予防医学への応用に繋がる今後のパーソナリティー研究の方向性に関する興味ある報告であった。

本学会では、「環境健康影響」という共通の観点から、これまで学際的な研究アプローチを積極的に推し進めてきたが、「ストレス科学」も多方面からの研究アプローチが必須の分野である。今後の「ストレス科学研究」の方向性を探る上できわめて有意義なシンポジウムであった。